

令和元年度

小泉八雲をよむ

感想文・詩
入賞作品集

松江市
松江市教育委員会
八雲会



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とした様々な事業を行っています。

昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十四回目となりました。今回は、感想文九十六編、詩四十一編、合計一三七編の力作をお寄せいただきました。

作品集には、応募作品のうち優秀賞、優良賞及び佳作を受賞した十四編の作品を掲載しています。多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

結びに、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

令和二年三月

主催 松江市

松江教育委員会
八雲会

後援 毎日新聞松江支局

BSS山陰放送
小泉八雲記念館

目次

第34回 感想文 入賞者

★小学生の部

〔優良賞〕

雪女の涙

青森県六ヶ所村 武長 恒樹……………1

講評……………1

★中高生の部

〔優秀賞〕

絶えざる越境の人、小泉八雲

東京都江東区 常岡 一貴……………2

〔優良賞〕

『日本の面影』を読んで

神奈川県横浜市 柳下 菜々花……………3

〔佳作〕

小泉八雲の生涯

沖縄県宜野湾市 外間 玲美……………5

のっぺらぼうと私

東京都文京区 西川 明里……………6

講評……………8

★一般の部

〔優秀賞〕

怪談を読むこと

島根県隠岐の島町 藤野 育……………8

〔優良賞〕

心を逸らす

茨城県かすみがうら市 川淵 紀和……………9

〔佳作〕

オーブン・マインドの精神

島根県松江市 山尾 一郎……………11

八雲が聞いた虫の声

北海道札幌市 目黒 雄司……………12

「日本人の微笑」を読んで考えたこと

埼玉県さいたま市 小林 秀祐……………14

講評……………16

第31回 詩 入賞者

〔優秀賞〕

おうち

愛知県一宮市 大江 豊……………17

〔優良賞〕

耳なし芳一さま

福岡県福岡市 吉岡 幸一……………18

〔佳作〕

蛍——神様がくれた光の滴

広島県呉市 木塚 康成……………19

ぬちぐすい

千葉県柏市 渡会 三男……………20

講評……………21

感
想
文

小学生の部

〈優良賞〉

「雪女の涙」

青森県六ヶ所村 武 長 恒 樹

「もしもいったら、わたしはおまえをころしてやるからね。」

この一文に衝撃を受けました。なぜなら、殺すというこわい言葉は、ぼくが今までに読んだ本の中ではなかった言葉だからです。巳之吉といっしょにいた茂作が雪女に殺されたから、ぼくは、先が気になりました。巳之吉も殺されるのではないかと、思ったからです。雪女は巳之吉に

「今夜おまえが見たことは、だれにもいつてはいけませんよ。」

と言いました。巳之吉は、雪女を見たことを言っではいけないのです。

そんな大事な約束を巳之吉は忘れてしまいました。ぼくは、巳之吉がお雪と十人の子供に恵まれて、しあわせすぎたと思います。それで、殺されるというきょうふがだんだん薄まってとうとう約束を忘れてしまったと思いました。だから巳之吉はあんだんの明かりに照らされたお雪の顔を見たときに思い出話として雪女の話をしてしまいました。

ぼくは、巳之吉が殺されると思っどきどきしました。けれど、

雪女は、巳之吉が約束をやぶっても殺しませんでした。巳之吉が死んでしまったら、残された子供は、生きていけないからです。ぼくは、最初

「おまえをころしてやる」

と言った雪女をこわいと思いました。けれど子供のために巳之吉を殺さなかった雪女は、人間じゃないけれど人間のお母さんと同じだと思いました。ぼくは、子供の気もちになると、悲しいです。朝起きて、お母さんがいなくなったら、すごく悲しいです。ぼくも一回、お母さんが遠い所へ仕事に行って、離れたことがあるからです。そのときは、ぼくも悲しかったです。お母さんも悲しかったと思います。だから、雪女も泣いていて白い霧は、雪女の涙だったかもしれません。

講評

今回の小学生の部への応募は、残念ながら前回よりも七点減って二点のみであった。応募された二点の作品とも、登場人物の気持ちに共感しながら読み進め、素直な思いを語りかけるように綴られた好感がもてる感想文であった。ただ今回は優秀賞の基準にはわずかに及ばず、優良賞のみとした。

優良賞の「雪女の涙」は、こわい話ながら、雪女の母としての愛情の深さや、母を慕う子どもの思いを、自分の体験とつなげながら感想を述べている点が優れている。また物語文中の白い霧を

雪女の流す涙と結びつけてとらえ、この感想文のタイトルにした点もよかった。

最後に、一人でも多くの小学生が、小泉八雲の作品にふれ、自分なりに感じたおもしろさや作品から学んだことを自分の言葉で表現してみてほしいと願っている。

(講評者 森脇 紀浩)

中高生の部

〈優秀賞〉

絶えざる越境の人、小泉八雲

東京都江東区 常岡 一 貴

『古今著聞集』に収められた物語「おしどり」を小泉八雲が再話作品として執筆する時、彼はそのタイトル「おしどり」を決して英訳しない。ひとたび英訳してしまえば、仲睦まじい夫婦のイメージを喚起する日本語の力が霧散してしまうからにはかならない。それぞれの文化圏において、象徴的な意味をもつ動物が存在している。小泉八雲は、いかにして日本人がおしどりを象徴的に解釈しているのかを理解し尊重した。私はここに、小泉八雲の「絶えざる越境の人」としての相貌を見出さずにはいられない。ギリシア出身のこの

作家にとつて、国境という人為的な境界線はさして大きな意味をもたないのである。

「おしどり」の原文は四百字ほどのじつに小さな物語である。それに比して、小泉八雲の手になる「おしどり」はおよそ三倍の長さをも有し、作中人物による発話がかなり多く小泉八雲によって書き加えられている。

鷹狩に出かけたものの何一つ獲物を手にいれることのできなかった尊允という男が、帰路ひとつがいの鴛鴦わしどりを沼で見つけ、その雄鳥を弓矢でしとめる。物語の発端となるこの場面において、小泉八雲の再話作品と『古今著聞集』の原文との間にはさほど大きな懸隔はない。この後にひとり残された鴛鴦の雌鳥は人間の女性に姿を変え、尊允の夢のなかに現れる。まさしく、この場面から小泉八雲の圧倒的な筆力が発揮されるのである。

『古今著聞集』では、「どなたがそのように泣いているですか」と男に問われて初めて、女性はみずからの悲哀を語りだす。いささか図式的ではあるが、それでもやはり、このような慎ましさのうちに私は日本の女性的なものを感取せずにはいられない。しかしながら、小泉八雲によって描出される女性は、あまりにも直情的に、しかし理路整然と男に向かって胸中の怒りを投げつけるのである。とりわけ印象的なリフレインがある。

あなたは何をなさったか自分でもわからないのです。そうです、わからないのです。しかし、明日赤沼へ行けば、おわかりになります。

しよう、きつとおわかりになりました。

愛する男性を奪われた女性の底知れぬ悲哀と情念が小泉八雲によって切々と描かれている。またしても、小泉八雲は男性／女性という境界線をも踏破してしまうのである。私が小泉八雲を「絶えざる越境の人」と呼びたくなる理由はここにも存している。小泉八雲の軽やかさに読者はただ驚くしかない。このリフレインの過剰性は、私たち読者を強力に誘惑する巧みな文学的な装置である。小泉八雲の越境の精神は、女性の切実な思いまでもあますところなく理解した上で、それを鮮やかに演出する。

はるか時代を隔てた『古今著聞集』の作品も、小泉八雲は驚異的な筆力によって、その魅力を再賦活さふかつかさせるのである。たとえば、「おしどり」の最後の場面は小泉八雲によって高度に映像的に描き直されている。『古今著聞集』において、男は自死した雌鳥を見つめるにすぎないのだが、小泉八雲の作品のなかの雌鳥はまさに男の目の前まで進み出でて、自ら命を絶つて見せるのである。同じ死が描かれてはいるものの、この静と動の対比に私は衝撃を覚えた。もはや見事なまでに対照的な人物造形である。むしろ、この両者のコントラストの妙味を享受するために、小泉八雲の再話作品と『古今著聞集』の原文の併読が前提になっているのではないかとさえ読者は勘繰りたくなるほどである。

異邦人として日本で生活しながらも日本文化と日本人の心の機微を知悉ちしつし、男性でありながらも女性のこまやかな心を確かな筆致で

描く小泉八雲。彼は、国と国を隔てる境界線、男性と女性の間の境界線、時代と時代を分かつ境界線、そうしたさまざまな境界線をやすやすと越えてみせる。小泉八雲の『怪談・奇談』に収録された「おしどり」は、彼の越境の精神が凝縮されていると言いうことができる再話作品である。日本に古くから伝わる物語の興味深さと精髓を私たち日本人の読者たちに意外な方法で教えてくれるのが、「絶えざる越境の人」小泉八雲である。

〈優良賞〉

『日本の面影』を読んで

神奈川県横浜市 柳 下 菜々花

小泉八雲という名前を聞いたとき、私たちはまず『怪談』の作者であることが一番に思い浮かび、次に東大で夏目漱石の前任として英文学を講義していたということを思い出すだろう。私自身、彼に対して上記二つのイメージしか持っていなかったが、今回、『日本の面影』を読み、「西洋人として初めて出雲大社に昇殿を許された人物」という要素が加わった。

明治二十三年四月、横浜港から来日した八雲は、もともと日本文化に興味を持っていたこともあり、精力的に寺院巡りを行い、七月には英語教師として松山へ向かった。同年の九月には出雲大社への

昇殿がなくなっており、驚くほどの短期間で昇殿を成し遂げている。そこには強力な紹介者の存在が大きく影響したことは間違いないが、『日本の面影』の中の「杵築——日本最古の神社」を読んだ後には、違う要因もあったのではないかと感じた。八雲が持っていた日本古来の信仰に対する深い畏敬の念が純粹であったことが大きく作用したのではないかと思う。

なぜ八雲が出雲大社での参拝を願い許可を喜んだのかを探るためには、宗教に対する八雲の考え方を知ることが必要だろう。「東洋の第一日目」を読むことで、八雲の日本の宗教に対する理解の深さと探求心の旺盛さがうかがえる。寺院で案内役の学生に「どうして仏様を信じないのに、お供えをなさったのですか？」と聞かれ、八雲は次のように答える。「私は、仏陀の教えの美しさと、それに従う人々の信仰を崇敬しています」。宗教の教義そのものではなく、信じる人々の心の在り方を尊重する姿勢は、彼が生まれてからギリシャ、イギリス、アイルランド、フランス、アメリカ、マルティニーク島と様々な場所で多様な文化を体験してきたことと無関係ではあるまい。自身は仏教徒ではなくとも、真剣に祈りをささげる人々の姿を美しいと思う審美眼を持っていたことが、当時の日本人たちにも強く伝わったのだろう。八雲は寺へ参拝する人々の姿を「とても純真な帰依の心で自然にひざまづくその姿は、本当に奥ゆかしい。」と表現している。自分にはやはりキリスト教徒ではないと自覚していた八雲の感想からは、賛美の言葉の中に純粹な信仰をささげる対象があることへの若干の羨望も感じ取れる。

八雲は出雲大社に参拝し、昇殿した時、その歴史的な重みについて言及している。「日本の最も古いこの土地で、民衆から千家氏に寄せられる深い尊敬の念や、彼が握っている大きな宗教的権威や、神々の血統を引くこの一族に、太古から連綿と受け継がれているその高貴さに思いが及ぶと、敬意というより畏怖に近いものさえ感じた」と表現している。アメリカ滞在時代に、土着の文化とフランスの文化が混ざったマルティニーク島に二年間も滞在し、滞在記を著していた八雲にとっては、マルティニーク島とは対極の古代からの文化を守り続ける姿勢に大いに興味をひかれたのだろう。伝え続けることの困難さ、変わらないことの貴重さを理解して、官司に「伊勢神宮よりも古いのでは？」と質問している。

私は、八雲が様々な土地や文化に触れた後で、明治期の日本という伝統の色合いが濃く残っていた土地に強くひかれたことにとっても興味をもった。私自身、異文化の比較ということに興味を持ち、今後その方面の勉強を専門に行いたいと考えているが、変わらないことが持つ価値というものに改めて気づかされた思いである。八雲が子供時代を過ごしたアイルランドにしても、興味をもって滞在したマルティニーク島にしても、歴史的に外来の文化に在来の文化が混ざり、純粹なものが残っていない土地であるともいえる。異なる文化が融合することで、化学反応のように全く新しい魅力的な文化を生み出すことが可能になるが、その過程でもととの文化は消え去るのが通常である。特にアイルランドはケルト文化が失われ、ゲルマン文化、その後イングランドの文化が支配的となっている。その

姿を見た後で、千年以上同じ神事を執り行い続けてきた出雲大社の在り方は、一種の奇跡のように八雲の目に映ったのではないだろうか。

また、体感的に小さくなった世界に暮らし、異なる文化を背景に持つ人々との接触が多くなった現代人にとって、八雲が見せた相手の尊敬するものを尊重する姿勢は、学ぶところが多いと感じている。八雲は日本に来る前から「古事記」を読み込み、内容をよく理解していた。現代の私たちも異なる宗教を持つ人々に対して、その祈りの心を理解しようとする精神を持つことで、友好的な関係を築けるだろう。

〈佳作〉

小泉八雲の生涯

沖縄県宜野湾市 外間 玲美

怪異、復讐、色恋沙汰。私が連想する小泉八雲の「怪談」のイメージは、古典文学の作品そのものだと思う。今日に至るまで未永く愛読されてきた「源氏物語」や「伊勢物語」には必然的に恋愛や恋が実らず怨みの果てに鬼・霊となり現れる怪異、その時代のトレンドとして政治の動向などが主な話題となる。他の作品でも似たような話が軸となる事は、世論の興味が同じ方向である事に自明であ

る。

そのため、恥ずかしながら私は小泉八雲は日本人であると思いついでいた。八雲の本名が「ラフカディオ・ハーン」で西洋生まれの外国人だと知った時はかなり衝撃を受けた。

八雲の怪談は古き良き時代の日本であり、その繊細で優美な表現法は記憶に鮮明に残っている。勿論、その中にはトラウマとなる程のものも存在する。かの有名な「耳なし芳一」を聞くと毎回思い出す子守歌がある。

大村御殿の角なかい

耳切坊主が立つちよんど

泣いちよる童耳ぐすぐす

へいヨーへいヨー泣くなよ

この歌は私の地元沖縄で歌われている。昔悪さをしてた坊さんが耳を切り落とされ幽霊となって出たので、泣いている子供に「泣く子の耳は耳切坊主にグス、グスツと音をたてて切られるよ」といい半ば脅しのような形で伝えられている。幼い頃は恐怖で頭と爪先は必ず掛け布団で覆って寝ていたものだ。耳なし芳一と話は異なるが、耳が無理矢理引き離されることへの恐怖が類似しているため、背筋が寒くなるのである。

八雲の怪談は恐怖だけではない。「青柳の話」や「雪女」は何とも切なく、たおやかな女性との恋物語である。この話でも八雲は日本の神道を理解しその能力を発揮している。何故八雲は日本の神道や怪談に異常なまでに関心を寄せたのか。私は小泉八雲またはラフ

カディオ・ハーンの生涯に心がひかれた。

ハーンが興味を抱いたのは「古事記」であった。その後来日する機会があり、「神々の国の首都」とも呼ばれる島根県の松江に滞在するようになってから心境の変化が訪れたのだ。あまたの神の集落地である出雲に住む人々の神への信仰を目の当たりにし、今もなお人々の心の中で生き続けている事実に感嘆した。ハーンの故郷はギリシャのレフカス島である。ギリシャ神話のように、多くの神が住んでいる、という事実は実は受け入れやすかったのではないかと思う。実際、古代地中海世界の人々の故人に対する感情やお墓詣りの気持ちなどを綴った「古代都市」の内容は日本の風習と酷似している。ハーンは日本で小泉節子という女性と結婚した。日本神話に登場する八雲という名を夫人の方の年寄の誰かが言い出したと言われているがその名をすんなりと受け入れられたのは、彼自身の中に島根を愛する心があったからではないかと思う。ハーンが小泉八雲と改名した事を「小泉八雲とカミガミの世界」という本で私は初めて知ったのだ。八雲が怪談に関心を寄せた理由は自身の経験からであった。日本に来るまでに八雲はかなり波瀾万丈で悲惨な人生を歩んでいた。幼児期の母との生き別れや家庭の崩壊といった出来事により精神不安定により、夜な夜な妖怪変化にさいなまれていた。しかし他の作家の怪奇小説を読み、他人の共感性に安堵したため、自身の体験も伴い怪奇小説に魅了されたのだった。怪奇小説の中に女性、それも優しく温かみのある女性がよく登場する所以は八雲が母を思い慕っているのではないだろうか。母の存在は世界共通、

安心でき甘えられる大きな存在である。日本の仏教や神道にも母のような神が存在している。お地藏さんや天照大御神である。人々は無意識のうちに甘えを許される環境を求めているのかもしれない。八雲は日本らしい日本を愛していたのだろう。小説の端々にその様子が伺える。一方で西洋の上陸によりその美しさが泡沫のように消えてしまうことを酷く恐れていた。今の日本はどうだろうか。日々に追われ、大事な物を見失ってはいるだろうか。八雲が西洋至上主義に捉われることなく純粋な目で日本を理解しようとした努力があったからこそ、言葉の匠として西洋の美と日本の美をかけた芸術的な作品が生み出されたのだと思う。背景を知る事により、新たに世界が広がったように感じる。古き良き時代の真髄を、日本という国の歴史を振り替えり、見つけるためにも私はこれからも読書が続けていきたいと思う。

のっぺらぼうと私

東京都文京区 西川明里

私は十七歳になった今も自分の本当の顔を知りません。多くの人の中にいて自分顔が段々のっぺりとした目、耳、鼻、口が透けて他人からは小泉八雲が書いた「むじな」の主人公のようにのっぺらぼうの様な顔になっているのではないだろうかと思うことがあります

す。ですが、息をしているのでかろうじて鼻だけはツルツルとした皮膚の上に二つの穴が空いているのだらうと考えたりもします。この様に考えてしまうのは、私が自分の感情を顔に表すことが遅いという性分のせいなのだと思います。人が話をしているとき、その人の顔色を伺い「私はどんな顔をしていればいいのだらう」と考え、本当の自分の表情を見失いそうになります。恐らく、その時の私の顔は他の人から見たら何を考えているかわからない奇妙な顔に見えるでしょう。またそんな時私は自分の顔のパーツがハラハラと抜ける落ちる様な感覚になります。そして、皆に私がのつぺらぼうの様だと思われてしまう前に心配を消したいと思います。

幼かった頃、八雲の書いたのつぺらぼうと多くの妖怪達を恐怖を感じただけのものとして見ていました。しかし、今はその妖怪達に親しみさえ感じてしまうことがあります。そして、再び本を手に取り「むじな」を読み返してしまふのです。幼い頃何故あんなにも「むじな」に怖さを感じたのだらうと考えてみると、私にとつて「のつぺらぼう」はまだ見た事のない未知なる世界の住人だと思つたからなのではないでしょうか。そして、のつぺらぼう達の住む怪しげな世界の者達は暗い夜に現れ、自分を闇の中へ引きずり込んでしまふのではないかと恐ろしく思つたのだと思います。しかし、それが今では何度か読むうちに、のつぺらぼうに怖さだけでなく滑稽さと親しみやすさを感じる様になりました。私が感じるのつぺらぼうへの滑稽さは、何度も何度も人前に自分の顔をさらけ出す勇氣とも思えるはずの度胸と潔さです。のつぺらぼうは何故同じ顔を何度

も人前に出し、また八雲は何度もその顔を人前に出そうと思つたのでしょうか。そもそも、八雲が日本の地を踏んだ頃、日本に多く語り継がれていた民話や妖怪達は人々の暮らしの中で忘れ去られ、置き去りにされていたのではないのでしょうか。八雲が日本へ来た頃、日本は明治維新の頃で世の中が急激に変化し、人々も日々の暮らしをその流れに合わせるのがやつとで、古きものに思いを馳せる心の余裕を持ち合わせていなかったのだと思います。しかし、異国から来た八雲は外から内を見る事が出来たのでしよう。日本が古来から持つている内なる魅力に目を向けることが出来、昔から各地に伝わる民話や伝承に耳を傾け、活字にしようと思つたのではないのでしょうか。これは、もしかしたら奇跡とも言える程、凄いなのかもしれないと何度も八雲の本に触れるうちに思いました。もし、八雲が日本の地を踏んでいなかったら、多くの妖怪達は本当の闇の中に葬り去られ今日までその姿をとどめていることはなかったかも知れません。現実の社会では昔のどこか滑稽で懐かしい様なオバケを見る事が出来ません。代わりに本当に恐ろしい姿無き闇があり、昔の妖怪達に思いを寄せる事などないでしょう。八雲の書いたのつぺらぼうはその姿を人前に何度も出すことで、人を怖がらす為ではなく、「おまえさんに見せたのは、それ、こんなじゃなえのかえ？」と、再び同じ顔を出すむじなのように自分の存在を知ってもらふ為、自らの姿を作り出して思つたのだと思います。八雲の作品の多くの主人公達は自分の声を持たぬ妖怪達です。しかし、八雲がその姿を文章に残すということをしたおかげで、今も尚その姿を私たちの中に

留めておくことが出来ます。

のっぺらぼうと八雲は私に伝えます。のっぺらぼうでさえ、そこにいるのだと何度でも現れ、

「私はずっと昔からここに居るのだ！」

と、自分の存在を自ら人に伝える努力をしていることを。私が多くの人の中にいて自分自身を見失いそうになる時の方がのっぺらぼうのように、この世から忘れ、消されてしまう怖さより小さいのかもしれないと思いました。八雲とのっぺらぼうがその怖さを私に教えてくれているうちに、私は私の中にある恐怖を少しずつ克服して前に進まなければならないのだと思いました。透明人間になってしまいう前に、自分の顔のパーツを取り戻し、今いる自分を現代の環境に定着させ、逃げずに生きてみようと思います。暑い夏、八雲に出会うと私は多くの見えない者達から力を貰い、夏が過ぎると少しだけその者達を忘れてしまふけれど、また再び夏が来たら八雲と妖怪達を思い出すでしょう。そして、また私は本当の私を取り戻すことが出来るでしょう。

「ありがとう。八雲、そしてたくさん妖怪達。」

講評

今年度、高校生の応募作品が三十点を超え、昨年度と比べて三倍近く増えたが、中学生の応募が少なく、「中学生」の部として審査を行うことになった。全体的に、八雲の思考力や表現力等を

作品から味わい、自分自身の生き方につなげようとする感想が多かった。

優秀作品は、古典と対比しながら、人の情を巧みに伝える八雲の表現力や精神を丁寧に読み取っている。また、国や性別、時代を越えて現代に伝える八雲を「絶えざる越境の人」として捉えた着眼点もすばらしい。

優良作品は、人の生き方に対する見取りに優れた八雲が、尊敬するものを尊重するという審美眼の持ち主だと読み取っている。引用を巧みに使う構成に優れ、自分の生き方につなげる読み方をしている作品であった。

(講師者 前田 真利)

一般の部

〈優秀賞〉

怪談を読むこと

島根県隠岐の島町 藤野 育

怖いものに対する好奇心から怪談を読むようになったが、常識ではありえない話に入り込んだ後には、なんとなく自分の感覚が研ぎ澄まされるような感じがして、今なら幽霊とか見えるんじゃないか

という気さえしてくる。わからないことや目には見えないものをしてしっかりと感じて、怖がったり、知りたいと思ったりすることは私にとつて大切な時間だ。それは、情報にあふれた現代社会の中で、わからないことや理解できないことに対して耐性がなくなっているのを感じているからだと思う。無意識のうちにすぐに答えや結果を求めている。本当はこの世の中で私がわかっていることなんてごくわずかなものにすぎないということをすぐに忘れてしまう。だから、時折自分を振り返るために、比較的短く、ぐっと入り込めて、しっかりと恐怖を感じられる八雲の怪談を読む。中でも、「幽霊滝の伝説」の話を一番読んでいると思う。

この話は、私が知る中で最も恐ろしい話だ。言い伝えをもとに作られたもので、地元では広く知られた話であったという。山に住んでいるとされた天狗への畏れからこのような伝説ができたのかもしれない。今もあるというその滝に行ってみようかと、ホームページを見てみたり、Googleマップで調べたりはするのだが、結局恐怖に勝てず、行ったことはない。

この話を一番多く読んでいる理由は、話中にある、肝試しに山に上がって、目印に賽銭箱を持ちかえり、災難にあうという流れが、上田秋成の『春雨物語』の中にある「焚噺^{はんかひ}」の話によく似ていると気が付いたからである。八雲が「焚噺」から影響を受けた可能性は低く、「幽霊滝の伝説」に近い怪談は、昔はもつと広く知られた話であったのかもしれない。そう思っただけで何とかして見つけたいと調べていたとき、毎日のように読んでいた。結局類話を一つも見つかる

ことができなかつたのだが、「幽霊滝の伝説」を何度も読み返す中で、この話は私の中で最も恐ろしい話になっていった。全く救いがないのだ。人ではない存在の圧倒的な力、そしてそこには一切の情けがないことを思い知らされる。こういう圧倒的で、時に理不尽な力は、今も私の身近に潜んでいて、いつ私に襲いかかってもおかしくない。読み終えた時にそう気づいて、更に恐ろしくなる。恐怖に終わりが無い。

「幽霊滝の伝説」に限らず、怪談は、ただ恐ろしい話として完結しているのではなく、ずっと昔からあつた恐怖や、恐怖に対する考え方、教訓などが様々な形で描かれ、それらは現実の生活へとつながっていく。怪談を通してわからないことや目には見えないものに向き合い、自分の感覚を取り戻すという行為は、実は、ずっと昔からされてきた、怪談の味わい方の一つなのかもしれない。

〈優良賞〉

心を逸^そらす

茨城県かすみがうら市 川淵紀和

人の恨みがなぜ怖いのか、それは行き場のなくなった人の負の念が一層強さを増すからだろう。小泉八雲の「かけひき」に登場する罪人もまた、恨みを強く持った人間だ。死を間際にした罪人にとつ

て、逃げ場のない恨みがあれば無差別に人を貶めようとするだろう、今まさに彼をあやめようとする侍は懸念した。

しかし侍は、自分の正義感を罪人に振りかざすでもなく、同情して慰める訳でもなかった。侍が罪人の恨む心を速やかに逸らした一連の「かけひき」に、私は強く惹かれた。悲しみや恨み、負の念の持つて行き場を考えなければならぬのは、処刑される前の罪人に比べれば、まだしばらくは生きているだろう私にとっても他人事では済ませられないからだ。

侍は罪人に、自分がどう思っているのか、あるいは罪について、罪人に話して聞かせるのではなく、どれほどまで強い恨みを持っているのかを見せてほしいと、首を切り落としたあとと飛び石に噛み付くよう促した。首を切られた罪人は決死の思いで石の上端に噛み付いたが、その決死の思いの強さが、かえって罪人の恨みを果たす力として発散され、人々に恨みが及ぶことがなく済んだのだ。侍は知っていたのだらう。ほんとうの意味で強い念を成仏させるのは、正しさを説いて聞かせ、相手の心を改めるのではなく、いかにその強い念を別の目的に逸らすかということ。なにか別の目的を持つて成就させるように集中させることが恨みを散らす方法なのだ。

常識的な善悪でねじ伏せない、侍の「かけひき」による恨みの逸らし方はしなやかであり、自らの中にある強い念を、風や水のように向きや動きのあるものとして捉えているように思う。風がそよぐように、あるいは水が流れるように、すでにあるものが向かうべき

ところへ促すために、方向づけることであるべきところへ導かれるという発想だ。

恨みはともすれば肉感的で生々しい記憶として残ってしまう。時間が経つにつれ、想像力が悪意を肥大させ、ときに粘り気をもって心に張り付く。けれど、どんなに禍々しい怨念があつたとしても、それもまた本人の心情を外側から見ているぶんには、自然の中にあるエネルギーの一つだとして捉えることができる。そこには人間特有の善悪が持つ臭みはなくなってくる。自然の中にありふれている現象のように人の念を捉えることができれば、いつときの美しくも無常の現象に過ぎないだらう。だからこそ罪人が処されたあと、侍は清々しく人々に言つて聞かせることができた。

八雲の作品のなかで展開される不可思議な現象を描く眼差しは、人だから持つ悲喜こもごもの心模様を自然の中で起こる現象の一つとして捉えているのではないか。自然のなかで人が生き、そのあいだに介在する人が感じるさまざまな形なき思いの念を、触れるように物語を通して心が捉え直すきっかけを与えてくれてる気がしてならない。

生きていくうえで理不尽な仕打ちに遭い、相手を憎く思うことがあつたなら、強く抗う念が生まれてしまうのは仕方ないことなのかもしれない。罪を犯すほどではないにせよ、誰しもそのエネルギーを持って余して気を重くすることはある。そんなときは、別の目的に逸らすのはうまいやり方だ。自らの負の念は、あくまで自ら引き受けなければならぬが、本質を変えようとしてもそれは難しい。だ

から心のなかに侍を置き、そつと逸らしてもらうのだ。「その念の強さを別のかたちで見せてごらん」と。

《佳作》

「オープン・マインドの精神」

島根県松江市 山尾 一郎

数年前から、小泉八雲を表す言葉にオープン・マインドという表現が使われるようになった。オープン・マインドは、「開かれた心」又は「開かれた魂」という意味だ。池田雅之氏は、八雲のオープン・マインドを三つに分類し、一つ目は、自分の五感を解き放つという「自己解放のオープン・マインド」。二つ目は、他者、とりわけ弱者に対して、偏見のない温かな眼差しを持つという「やさしさのオープン・マインド」。そして三つ目が、他者への共感・共鳴という「共感のオープン・マインド」というように分けている。

私は、八雲の異文化に対して偏見を持たずに共感する姿勢で臨むオープン・マインドに感動を覚えた。明治政府は西欧列強に追いつくために欧化政策をとり、日本の伝統文化を顧みることをせずに歩んでいた。そういう時代に、日本の良さを西欧人が再発見するといふ役割を担った。近代化される前の日本には、慎ましくも誠実な暮らしがあり、それを支えるのが信仰心であり、美しい自然であるこ

とを日本人に気づかせたかったに違いない。

また、八雲は来日前には、仏領のマルティニク島で取材のために生活し、マイノリティの文化に対して偏見を持たずに接する大切さについて身をもって体験している。「上から目線」ではなく、相対的な視点で物事を見聞きした上で共鳴する。それが、八雲の流儀であり、現代人が学ぶべき点でもある。大国が自国主義に走ると、世界平和すら危うくなるのが現代である。今日、大国の指導者の言動を見ると、マイノリティに耳を傾けるどころか排除しようとする風潮がある。八雲の作品を、大国の指導者にも読んでもらいたい気持ちになる。

日本においても外国人労働者は増加の一途、外国人観光客も年間三千万人を超えている。急激に進む国際化に日本が対応するために、八雲が残したオープン・マインドの精神をしっかりと学ぶべきである。相手をまずは受け入れ、理解しようとする姿勢が基本となるはずだ。さらに、八雲は対立点があっても他者にひたすら耳を傾ける姿勢を崩さなかった。現代の国際社会では、対立点を際立たせ、その先には力の論理で解決していこうとする姿勢が見え隠れする。そのような国際情勢の中、オープン・マインドの精神の重要性を叫ぶにはいられない。

そして、急激に外国人が増加している状況を、江戸時代末期の黒船来航に例える人もいる。黒船来航時の日本人は、外国人に対して偏見を持たずに接することは時代背景から考えても無理であった。しかし、黒船来航から一六〇年以上がたち、政治形態も変わり国民

主権も確立し、国の隅々まで教育も行き届き、外国人をオープン・マインドの精神で受け入れる土壌が日本にはあるはずだ。

八雲は「日本人の微笑」の中で、「日本民衆の微笑は、菩薩像の微笑と同じ観念、つまり、自己抑制と克己の精神から生まれる至福を表しているのである」と述べている。微笑はアルカイックスマイルと言われ、心が平穏で幸せな状態を表している。日本人の道徳では、自己抑制することが理想とされ、それが無限の平安につながる境地である。これは、明治時代の日本人の評価ではあるが、現代にも通じるような気がする。西欧化し、合理主義が広がった日本ではあるが、根っこの部分には連綿と続く日本の精神土壌があるに違いない。

自己主張、自己表現することはとても大切であり、日本の学校教育でも自分の考えを持ち表現できる生徒を育成することをめざしている。しかし、過度な自己主張が常態化すれば、謙讓を美德とする日本文化が失われるかもしれない。自己主張と自己抑制は、二律背反する行為ではあるが、そのバランスが重要である。日本人は対立を避け、折り合いをつけることをうまくやってきたはずだ。

先日、「海外の風習であっても、保育園児のピアスは駄目なの？」という新聞記事を目にした。夫の母国では、女の子が生まれるとすぐにピアスをつけるという文化的な習慣がある。国際結婚後、一歳の双子の女児を育てる日本人女性が、入園を希望した認可保育園に安全確保を理由に受け入れに条件を付けられ、結局辞退した。西アフリカで女の子が生後間もないうちにピアスをつけるのは、「生き

る証し」や「魔よけ」などの意味があるとされ、親の愛情を表現する大事な慣習である。

異文化に対して共感する姿勢が第一にあれば、ピアスの安全確保もそれほど難しい問題ではないはずだ。まず相手を受け入れ、問題が起これば最善の策を講じることがオープン・マインドの精神である。拒否する理由を考える時間があれば、どうしたら改善できるのか共生のために何ができるかを考えるべきである。そういう努力をすることで、互いに理解し合える成熟した共生社会になっていくと八雲も考えていたはずだ。

八雲が聞いた虫の声

北海道札幌市 目黒雄司

まつむし、すずむし、きりぎりす……。秋の夜長に聞かれる小さな虫の声に、小泉八雲が深く心を寄せていたことは広く知られている。

例えば随想「虫の楽師」で、八雲は多様な虫の鳴き声をへボン式ローマ字で表現している。

「チンチロリン」と鳴くのはまつむしである。すずむしは「リイイイン」、うまおいは「ズインチョー!」。これは、多様な虫の声の的確な言語化であろう。

「虫の楽師」が収録されている『異国情趣と回顧』が出版されたのは明治三十一年（一八九八年）である。その後、明治四十三年（一九一〇年）になって、文部省唱歌「虫のこえ」が発表されている。

「あれ松虫が鳴いている。
ちんちろちんちろ　ちんちろりん」

当時の子どもたちは、この唱歌によつて、ちんちろりんと鳴くのは松虫、りーんりんと鳴くのは鈴虫と覚えたのである。

八雲が表現した様々な虫の声は、後年の文部省唱歌に再現し、社会に広く流布したと言えるのではあるまいか。

八雲が虫の声に関心を持った背景には、日本の古典文学への深い理解があつたことは疑いえない。「虫の楽師」で、源氏物語や古今和歌集などから、虫を詠んだ数多くの和歌が引照されている。

秋の野の草の袂に置く露は
音になく蟲の涙なるらん

古来から日本の歌人たちは、虫の音に耳を澄ませ、「その心に妖精の群のように湧きおこる繊細な空想を呼びおこすことができたのである」と八雲は書いている。

古い和歌を学ぶことで、八雲は日本の詩歌の真髄にふれ、自らの

文学の糧としたのであろう。

八雲は明治二十九年（一八九六年）から三十六年（一九〇三年）まで、東京帝国大学で英米文学を講じている。このうち「ポーの韻文」と題する講義で、E・A・ポーの「鐘」という詩を教材として取り上げている。

興味深いのは、ポーの詩に出てくる雪の上を走るソリの鈴の音が「日本の小さな虫、かんたんの鳴く音」に似ていると解釈していることである。

ポー自身は、日本に生息する虫の鳴き声など知るよしもなかったであろう。他方、八雲の講義を聞いた日本の学生たちは、西洋のソリの鈴の音など一度も聞いたことはなかったはずである。

大半の日本人にとって、西洋が遠い存在だった時代である。西洋のソリの鈴の音と日本の虫の声を重ね合わせる八雲の独得の視点を通して、学生たちは初めてポーの詩の世界を理解したに違いない。

東大に勤務していた当時、八雲は実際に小さな虫を自宅で飼っていたことがある。その経験を「草ひばり」（『骨董』所収）という随想にまとめている。

その虫は、夜ごと「リリリン」という震えるような調べを奏で、すっかりその音色に魅了されたという。

この歌は、だれかから習ったものではない。それは、虫が生まれながらに知っている歌であり、「幾億兆もの数限りない同種族の生涯を経て伝えられたところの、深いが、おぼろげな記憶の歌なのである」と八雲は綴っている。

ところが、ある晩秋の夜、飼っていた草ひばりの声が聞こえないことにふと気付く。虫かごを見ると、その虫は餌を与えられずに飢死していたのだ。女中が食べ物を与えるのを忘れていたのである。

草ひばりの最後は無残なものだったという。飢えのために、自らの足を食っていたのである。それでも最後まで美しい歌を奏で続けることをやめなかった。

虫の音が聞こえない静寂の中で、小さな草ひばりを死なせてしまった罪悪感に八雲はとらわれる…。

考えてみれば、人間もまた草ひばりのような存在なのである。

「世には歌わんがために、われとわが身の心臓を食わねばならぬ人間のこおろぎがいるのである。」このように綴る八雲は、洋の東西を問わず、芸術に身を捧げる人々の運命を洞察していたのかもしれない。

「日本人の微笑」を読んで考えたこと

埼玉県さいたま市 小林 秀 祐

「日本人の微笑」は、一八九四年に出版された『知られぬ日本の面影』に収録されている作品二十七編の一つである。一八九〇年に来日した八雲が、自らの体験を踏まえながら、日本人の微笑に込め

られた真意を明らかにした秀作だと思った。

私が「日本人の微笑」を読んで印象に残ったことは二点ある。一点目は、日本人の微笑の持つ深い意味についてである。八雲が日本人の微笑に関する誤解例として挙げている女中さんの話を讀んだとき、芥川龍之介の短編小説『手巾』を思い出した。主人公の長谷川先生は、教え子だった男子生徒の母親から息子の死を告げられたが、母親は涙を見せず微笑さえ浮かべていた。不思議に思った先生だが、母親がテーブルの下でハンカチを握りしめ動かしている様子を見て、母親が顔では笑っていたが、実は全身で泣いていたことに気がつく。

八雲もこのような際の日本人の微笑について、「あなた様におかれては、私どもに不幸な出来事が起こったとお思いになりましても、どうぞ、お気を煩わされませんようお願いいたします。失礼を顧みず、このようなことをお伝えいたしますことを、お許しください」と言う意味だと解き明かしている。ちなみに、『手巾』が発表されたのは一九一六年だから、八雲の解釈の方が二十年以上も前になる。

日本人の微笑の背後に隠された深い意味を探り当てた八雲の洞察力は見事だ。しかも、日本人が見せる笑いを肯定的に解釈しようとした視点に感心する。日本語では、失笑、冷笑、嘲笑など、笑いを否定的に捉える言い方も多い。相手の示す笑いを、「相手から笑われた」と捉えるか、それとも「何か笑わざるを得ない事情を抱えているのかもしれない」と捉えるかによって、相手との距離が遠ざか

ることも近づくこともある。「親しみと共感を持つことができたなら、日本人の微笑の秘密を理解することができる」という八雲の視点を通して、日本人の微笑の持つ深い意味について改めて考えた。

「日本人の微笑」を読んで印象に残ったことの二点目は、仏像の微笑と日本人の精神性との関連についてである。八雲は、「日本民族の道徳的な理想主義が体現されているのが、鎌倉のあの素晴らしき大仏様であるように、私には思われる」と述べている。

「鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな」という与謝野晶子の短歌が示すように、鎌倉の大仏の美しさは有名である。八雲も、『知られぬ日本の面影』所収の「鎌倉・江ノ島詣で」の中で、「大仏様の美しさ、気高さ、この上ない安らかさは、それを生み出した日本人のより高い精神的生活を反映している」と鎌倉の大仏を称賛するとともに、日本人の精神性にも言及している。

八雲は地藏菩薩像を見たときに、「日本の民衆の微笑は、菩薩像の微笑と同じ観念、つまり、自己抑制と克己の精神から生まれる至福を表している」ことに気づく。このような気づきは、亀井勝一郎著『大和古寺風物誌』収録の「微笑について」という一文にも見ることができ、そこには、「我が思惟像が、あの幽遠な微笑を浮べるまでには、どれほどの難行苦行があったか。そこには思想消化の長い時間があり、また生硬で露骨な表情に対する激しい嫌悪があったにちがいない」と記されている。

来日早々の八雲が、仏教美術に造詣が深い亀井勝一郎と同様な気づきをしていることは興味深い。仏像の微笑を美術品として眺める

だけでなく、そこに込められた日本人の精神性に着目した八雲。日本の文化に対して敬意を払って考察しようと努めた八雲の姿勢が素晴らしい。私たちは、このような八雲の姿勢から学ぶべき点があるのではないだろうか。

外国の人々が日本人をどう理解するか、また日本人が外国の人々をどう理解するかということは、明治の昔も令和の今も重大な問題である。特に現在においては、日本と韓国の関係が深刻化している。内閣府が二〇一九年十月に行った「外交に関する世論調査」によれば、韓国に親しみを感じない日本人の割合は前回調査の五八％から七一・五％へと急増した。今こそ、外国の文化に対して敬意を払いながら理解しようと努めた八雲の姿勢に立ち返るときであろう。

ところで、八雲終焉の地である東京都新宿区大久保には、小泉八雲記念公園がある。先日、この公園を訪れた私は、二〇一九年九月に設置されたモニュメントが目にとまった。モニュメントの台座には、駐日ギリシャ大使名で「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）生誕の地レフカダと、終焉の地新宿は、一九八九年十月の友好都市提携より相互に交流を重ね、理解と友情を深めてきました。このたび、友好都市提携から三十年を迎えるに当たり、今後ますます両市、両国の友好関係が深まることを願ひ、このモニュメントを新宿区へ捧げます」と刻まれていた。「親しみと共感」を大切にしたい八雲の想いは、今も受け継がれている、そして今後も受け継がれていってほしいと、改めて思った。

前回より応募作品が増え、それぞれの内容もバラエティに富んでおり、充実した審査になった。優秀賞の「怪談を読むこと」はなかでも出色だった。たいへんな読書家であることが伝わってくる文章。グーグルで検索して何でも分かったような気分になることに疑問を持ち、常識ではありえない小泉八雲の怪談に入り込んで感覚を研ぎ澄ますということに共感を覚えた。他の審査員の評価も高かった。

優秀賞の「心を逸らす」は、八雲の「かけひき」がテーマ。「ときに粘り気を持って心に張り付く」ほどの恨みにどう向き合うか。負のエネルギーがあふれる現代社会を背景に作品を解きほぐした点に感じ入った。

（講評者 岩崎 誠）

詩

〈優秀賞〉

おうち

愛知県一宮市 大江 豊

掃除をしていたら

出て来た 虫籠だった

聞かなくても わかるよ

お爺ちゃんのモノだろう

一度も見せてくれなかった

竹軸でできた 虫籠は

空っぽのようで そうでない

木のおうちなのだよ

と 教えてくれる人が

風で あるいは

草いきれで あるいは

そばにいてくれた

記念館で

見つけた虫籠は

舟のかたちのモノまで

あって あれは

住処であって 乗り物でも

あるのだな と だから

節子さんの聞き書きが

生きた伝言板であったように

昆虫たちも お客様だった

家屋敷として 虫籠には

戸口が あったのだ

閉じ込める

モノではない

まして 買い物では

買えない ハーン先生の

虫籠を見詰めていると

そつと 指先で

戸を開け てのひらを

入れて 昆虫の姿を

ハンドサインで

真似してみたくなった

ゆりかごのように 虫さん

唄い出して おくれ

〈優良賞〉

耳なし芳一さま

福岡県福岡市 吉岡幸一

芳一さま

あなたの耳はやわらかく

真綿のような肌触りです

わたしがあなたを欲したのは何故でしょう

あなたの琵琶の音がわたしを癒し

あなたの声がわたしを誘ったのです

けっして耳がほしかったわけではありません

耳などなくてもよかったです

神仏の加護により

わたしを避けるあなたに腹がたっただけです

嫌われ、恐れられるわたしですが

なにも好きこのんで

深き業を抱えているわけではないのです

どんなにわたしが救われたいか

どんなにこの闇のような業から逃れたいか

わかりますか

わかりますでしょうか

きつと信じてはいただけないでしょう

怨霊となりはてたわたしは醜く

わたしの前では美しいものは皆背をむける

だからわたしはより醜く、より恐ろしく

あらねばならないのです

わたしの存在が悪ならば

あなたの存在はなんでしょうか

まさか善だなんていわないでしょう

ただ闇よりも静かに、夜よりも深く

そこにあり続けるだけなのではないですか

だからこそ、わたしはあなたを欲したのです

芳一さま

あなたの耳はやわらかく

鴟トビの羽のようになめらかです

赤間神宮の奥にいまもあなたは座っています

あなたの語る平家物語が耳に残っています

平家の怨霊としていまも

あなたの側にいることを許してください

言い伝えでは、あなたの耳を奪ったあとで

一度も現われなかったことになっています

それでいいのです。それでいいのです。

しかし、ときどき鬼火となって

あなたの像の頭上でわたしは舞っています

経文の書かれた軀がたとえ見えなくても

わたしの耳には琵琶の音が

聞こえてくるのです

あなたが鳴らさずとも聞こえてくるのです

芳一さま

あなたの耳はやわらかく

関門の荒い潮のかおりがします

どうか哀れんでください

怨霊になりたくてなったではありません

もう一度、琵琶をかき鳴らしてください

もう一度、平家物語を語ってください

壇ノ浦の段を聞きながら

わたしは涙を流したいのです。

耳なし芳一さま、盲目の芳一さま

わたしはいつ救われるのでしょうか

〈佳作〉

蛍―神様がくれた光の滴

広島県呉市 木塚康成

かれらは なぜ あんな小さなカラダに

大きくて 冷たい発光装置を

進化させることが出来たのだろうか

さらに 不思議なのは死んで硬くなっても

水に浸すと ふたたび発光することである

つまり 途轍もなく律儀な生き物なのだ

ぼくの話は

博覧強記のヘルンさんと違って

蛍は 一匹しか登場しない

そもそも 人生で

手のひらに蛍を乗せることなんて

そんなに多くはないだろう

ほくらが かれらの生息域を

こんなにも蹂躪してきたというのに

かれらはほくららの所に 絶妙のタイミングで

密やかに飛んできて

命の明滅を見せてくれるのだ

妻が長女を出産後 体調を崩し

転地療養のため 海辺の一軒家へ

移り住んだ最初の夜の出来事である

風呂釜に

梱包材や 山で拾ったほだを押し込むと

スレートの煙突は 暗闇に向かって

竜のように 炎と火の粉を吐き出した

風呂場から 妻と娘の

きゃあきゃあという笑い声が響いた

芹の生い繁るせせらぎの音が

それに重なった

裸電球のしたで

妻は頬を火照らせながら

真つ赤になった娘をしっかりと抱いて

「この子、五右衛門風呂が好きみたい」

と 久しぶりに笑みを浮かべた

ぼくは バスタオルを大きくひろげた

そして 実家から貰った年代物の蚊帳を

汗をかきながら 二人で吊った

樟脳の臭いが 部屋中にほわっとひろがる

あかりを消すと

傷んだ木製の網戸から

いろいろな虫の鳴き声と

幾千もの星の光が飛び込んできた

九時丁度 鳥じゅうに

チャイムが鳴り響いた

ぼくはうとうととしていたようだ

寝息を立てている娘に目をやると

小さな指のあいだに 一匹のホタルが

サイリウムのようにみどり色に光っていた

そつと ぼくの手のひらに移すと

妻が顔を寄せてきた

神様がくれた光の滴が 光彩に変わった

放してやると 蛍は役目を終えたように

短い光跡を描いて あつという間に

闇に消えてしまった

ぬちぐすい

千葉県柏市 渡会 三男

「婿サアの口に合うかどうか？」

怖ず怖ずと義母が食卓に置くヒージャー汁。

その臭いにたじろぎながら私は妻の赤子の頬を思い浮かべる。

昭和二十二年。

灰燼^{かじん}と化した沖繩で、母乳の出ない母に代わって赤子の妻の命を救ったのは戦場で奇跡的に生き残った一頭の山羊だった。

「飼い主は近所のオジイで、竹のように痩せた赤子を見て号泣したさあ。『古い先短いワシよりも』と毎朝届けてくれる搾りたての乳をこの子は喉を鳴らして飲んだんだ」

その話には私は小泉八雲の怪談『姥桜』を思い出す。

長者の姫を救うために自らの命を犠牲にした乳母の願いによって植えられた桜が季節が来ると、母乳のような色の花を咲かせる――。

とは言え、大人になった妻は山羊も羊も口にしない。

北海道に行っても私はジンギスカン、妻はホッケの塩焼きだ。

「山羊の乳を飲み過ぎた子供の頃のトラウマかもしれない。臭いが鼻につくのよ」と。

家でも私が羊肉を食すとき、妻は換気扇を回して窓を開け放つ。

南国の太陽にバテて食欲の失せた私のために義母が作ってくれた滋養強壯食。

「嬉しいサア。ウチナンチューでも嫌がつて廢れていくのに、ヤマトンチューの婿サアがヒージャー汁を食べてくれるとは」

ぬちぐすい（命の薬）と念じ、私は山羊の肉を噛みちぎり、汁を飲み干す。

戦後を必死に生きた義母の人生と生き残った山羊と生き残った赤子の顔を想いつつ。

講評

今回は昨年度と比べ大幅増で、四十二篇の応募があった。八雲作品と自らの体験とを通した一層深い読みが実現されていた。

優秀賞「おうち」は、「閉じ込める／モノではない」という思いに貫かれる。記念館の虫籠を見て「住処であって乗り物でも／あるのだな」と、ハンドサインで昆虫を模したくなる作者。今も昆虫たちが「おうち」に住むかのように、その存在をありありと感じている。虫を愛した八雲と共通する温かなまなざしを作品に見た。優良賞「耳なし芳一さま」は、手紙形式に則った語りを読む者の心に入り込み、怪談の世界へと繋げてくれる。詩の魂と八雲作品の魂とが響き合い、言霊が融け合うようだ。語り口調が自由なイメージを練り捻げつつ、得体の知れない世界へと誘う。魂を揺さぶられた感がある。

（講評者 升田 尚世・稲田 忠徳）

【審査員】

稲田 忠徳 岩崎 誠 内田 融
小林久美子 高嶋 敏展 前田 真利
升田 尚世 森脇 紀浩 (五十音順)

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)
1891(明治24)年 小泉家蔵

令和元年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文・詩 入賞作品集**

令和2年3月

編集・発行 松 江 市
松江市教育委員会
八 雲 会

